

〈資料1〉 「大学院生講座」「一橋大学連携講座」

これまでのテーマ一覧（「市民だより」掲載広報文より）

大学院生講座

1) 2014年2月 「映画の音響効果学——見えない声から何が見える？」

音楽、効果音、ナレーションなど映画はさまざまな音響効果に彩られています。この講座では、映画を「見る」ときに忘れられがちな音声に注目し、音声から映画の仕組みを考えます。

入門編の初回はホラー映画のお話。見えないおばけの声を頼りに無声映画から現代まで映画史をたどっていきます。2回目は講師の専門の原爆映画のお話。1950年代の原爆映画に込められた、平和や教育などの願いを映画音楽から分析します。

2) 2014年5月 「建築と映像——光と影から見る建築」

街にあふれる建築物。その一つ一つの連なりが、街や都市の景観をつくっています。そんな建築物が求める「光」は何をどのように見せ、そして何を隠してしまうのか。

初回は、第二次世界大戦前の欧米の映画や映像をもとに、現代に通じる近代建築が求めた「光」と、その光が生み出した都市の「影」を見つめます。ル・コルビュジエの作品を題材にします。

2回目は、現代映画を用いて、「光」の裏側である「影」から、建物そして都市の景観を考えてみたいと思います。

3) 2014年10月 「世にも奇妙な小津映画——揺れない列車と鳴り続けるピアノ」

小津安二郎の映画は、日本人の日常生活を描いた「静かなホームドラマ」とよく言われます。ところが、この静けさの中で実は奇妙なことが起こっていることはあまり知られていません。この講座では、小津映画の奇妙さに注目し、音と映像を仔細に見ながら小津映画の仕組みを考えます。

初回は列車のお話。『父ありき』を題材に、揺れない列車内の画面から小津映画独自の規範を明らかにします。2回目は、『秋日和』の繰り返されるピアノ音楽から小津映画のサイレント性を明らかにします。

4) 2015年3月 「テレビに宇宙人がやってきた！ 初期ウルトラシリーズから迫る
“本格特撮テレビ映画”の正体」

来る2020年の五輪開催地が東京に決定しました。

今から約半世紀前、1964年の東京五輪から生まれた流行語「ウルトラC」にちなんで命名され、1966年にテレビ放送された『ウルトラQ』は、日本初の本格特撮テレビ映画すなわち特撮を主役とするフィルム製作のテレビドラマでした。当時一世を風靡したテレビ映画とは、本格特撮テレビ映画の新しさとは、いかなるものだったのでしょうか。

初回は『ウルトラQ』の中から「2020年の兆戦」という名のまるで予言のような一話を徹底解剖し、第2回は『ウルトラQ』『ウルトラマン』『ウルトラセブン』を中心に、「地球」とテレビに來襲する宇宙人の系譜を辿りながらその間に迫ります。

5) 2015年5月 「救いをもたらすのは一体誰？——オペラにおけるフィナーレの変遷」

愛する人との離別、バレちゃった不倫。神様のきつい命令、迫る契約、ああ困った困った。でも物語の上でなら、誰かがきっと救ってくれる！

オペラも、長い間人々のそんな期待に応えてきました。納得の「めでたしめでたし」に向けてトラブルを解決し、人々を救いに訪れるのは、神か、はたまた英雄か？ その設定は時代にあわせて実はどんどん変わってきました。初回はモーツァルト、2回目はワーグナーを取り上げ、二人の偉大な作曲家がそれぞれ選んだ「救済者」を吟味しながら、隠れたメッセージと時代診断に耳傾けます。

6) 2015年12月 「「故郷」とはいかなる場所か？——『苦界浄土 わが水俣病』と流民の故郷」

「故郷」という言葉からみなさんは何を思い浮かべますか？ その人の経験の中で積み重なった土地と人との結びつきの中に、それぞれの「故郷」のイメージがあるでしょう。

水俣病事件を世に知らしめた石牟礼道子の『苦海浄土 わが水俣病』の中でも、「故郷」という言葉は、被害と加害の複層的な交差の中に生きることを意味を描くための鍵語となっています。この講座では、水俣病事件の歴史に伏流する「故郷」の思想的な意味を、石牟礼作品を通して探ります。

初回では60/70年代の石牟礼作品を中心に、第2回では同時代の「故郷」や「村」をめぐる

る思考を照らし合わせながら、考察を行います。

7) 2016年5月 「近代中国における自伝の誕生」

1930年代、中国では、現代文学が多様化していくなか、自伝が新たなジャンルとして注目されました。政界、文壇で活躍した人々がこぞって自伝を書き始めます。中国の近代化に貢献してきた知識人たちが、なぜ一斉に自らの人生を語り始めたのでしょうか。中国の古く深い歴史の中で「知識人」とその文学が果たしてきた役割を辿りながら、近代中国における自伝の誕生の意味を探ります。

8) 2016年12月 「日本は「見える」のか？ — 「異文化」としての日本と翻訳の問題」

『菊と刀』は日本文化を説く有名な著作ですが、著者のペネディクトは実は日本をその目で「見た」ことはありませんでした。一方、1964年の東京五輪の時にはカメラマンが日本を「見せよう」として詰めかけました。

見たこともない異国を言葉で、映像で描く試み。未知の「異文化」を捉えようとするとき、言葉と同じく視覚的イメージもまた、「翻訳」という厄介な問題にさらされます。本講座では、初回は『菊と刀』、2回目は『不思議なクミコ』というフランスの東京五輪記録映画を取り上げ、言語とイメージもごもの「翻訳」の複雑さと面白さに迫ります。

9) 2017年3月（予定） 「忘れられた画家 — 抽象表現主義前夜の「美術」をめぐって」

第二次大戦後、美術の中心はパリからニューヨークへ移ります。以降、一見するとペンを撒き散らしたような絵が、新しい芸術として価値付けられたことは、よく知られるところです。しかし、その前史にどんな絵が評価されていたかを知る人は少ないでしょう。この講座では、戦時中に活躍した二人のアマチュア画家に注目します。彼らは晩年になってから独学で絵を描き始め、すぐさま脚光を浴びた特異な存在でした。しかし、戦後の潮流に乗ることなく、忘れ去られます。誰が、何が、美術を美術たらしめるのか？ 絵を「美術化」させる作用に注目します。

初回はモリス・ハーシュフィールド、2回目はジャネット・ソーベルという、知られざる画家たちを取り上げます。

教育講座 改め 一橋大学連携講座

1) 2015年1～3月 「寛容」について学び、伝え、考える」

「寛容」について考えさせられる話題やニュースが近年増えてきているのではないのでしょうか。「許さない」「許せない!」そんな言葉があふれるなか、「不寛容」を批判する言葉もよく目にします。現代社会で求められている「寛容」とはどのようなものなのでしょうか。

一昨年の「地域活動入門」講座からできたグループでは、市民と一橋大学大学院のメンバーが道德教育について考える時間を約1年間重ねてきました。2018年度から小中学校で「道德の時間」が教科化される見通しであることなども背景に、この講座では、皆さんと一緒に現代の「寛容」について考えたいと思います。

回	月日	テーマ	講師(所属)
1	1月10日	これまでの活動紹介/ 道德教育の変遷	武村知子(言語社会研究科)/ 浦野歩(同大学院生)
2	1月24日	「寛容」について	藤野寛(言語社会研究科)
3	2月7日	〈ワークショップ〉子ども達に 「寛容」を伝えるとしたら?	片岡佑介(同大学院生)
4	2月14日	前回のふり返り	武村知子
5	3月7日	全体のまとめ	山中弘(筑波大学)/藤野寛

2) 2016年1～3月 「クリーン」なものと「クリーン」でないもの～今日の不寛容について考える～」

アルコール消毒薬や空気清浄機を当たり前のように街で見かけることが増えています。脱臭・脱毛大流行、ケーブルTVは健康グッズのCM満載。こうした清潔や健康の推奨は、都市整備や公衆衛生の歴史を振り返ると、不潔や不審とみなされたものの排除と表裏一体の関係にありました。「クリーン」なものは、今日の社会の「不寛容」に一体どのような影響を及ぼしているのでしょうか。

昨年度の教育講座「寛容」について学び、伝え、考える」から1年。この講座では、皆さんと一緒に「クリーン」に潜む倫理観や美意識、怖れを手掛かりに現代の「不寛容」について考えたいと思います。

回	月日	テーマ	講師（所属）
1	1月17日	日常に潜む「クリーン」について	武村知子（言語社会研究科）／ 片岡佑介（同大学院生）
2	1月31日	言語に潜む「クリーン」について	糟谷啓介（言語社会研究科）
3	2月14日	〈ワークショップ〉キレイはキタナイ、キタナイはキレイ——一番キレイなものは何？	片岡佑介
4	2月28日	前回のふり返り	武村知子
5	3月13日	原爆映画に潜む「クリーン」について／全体のまとめ	片岡佑介／ 浦野歩（同大学院生）

3) 2017年1～3月 「街角にいつも「大学」がある ～くにたち教養マッピング～

くにたちという町のあちこちで、毎日いったい幾つの「講座」や「研究会」や「勉強会」が開かれているか、みなさんはご存じでしょうか？ 公民館主催のものだけでも、年間300を超える回数の講座があります。自主的な小さいグループや、単発のイベントなども含めたら、一橋大学全体の授業の数よりずっとずっと多いかも！

いつどこで誰が何をこつこつと学んでいるか、大学では大学の、町では町の「学問地図」が描けるはず。学府のうちそとの「学問地図」を重ね合わせてみたら、もう一枚の「くにたち文教地図」が見えてくるのではないのでしょうか。この講座ではそんな探究をしてみたいと思います。

回	月日	テーマ	講師（所属）
1	1月29日	書を捨てずに街に出よう ——学・術・技芸の万華鏡散歩	武村知子（言語社会研究科）／ 大河内泰樹（社会学研究科）
2	2月12日	文系の理、理系の文 ——文理は分離すべからず	筒井泉雄（商学研究科）
3	2月19日	〈ワークショップ〉 街角の小さな「学府」をあつめてみよう！	長名大地 （言語社会研究科大学院生）／ 武村知子
4	3月5日	前回の続きのワークショップ	および学者と卵たち
5	3月12日	ふり返りとまとめ	